

11 漢方：気の異常における診察法と治療のエビデンス構築

長井 篤

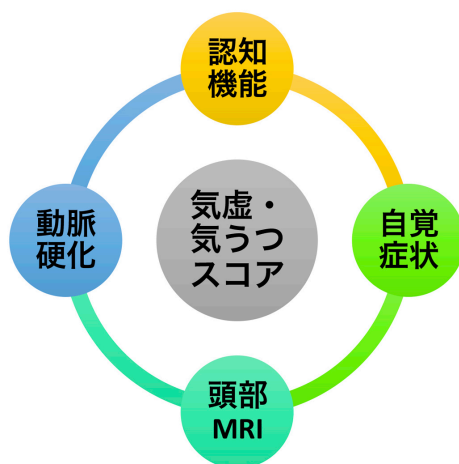
【目的】本邦で漢方薬の有効性が確認され実臨床で使用頻度も高いが、一方で適切な漢方薬の選択が困難なことも多い。その理由として漢方の診断が証という難解な診断手法に基づいており、エビデンスが得られにくい点が挙げられる。そのような中、漢方薬の治療効果についてはエビデンスの報告が見られるが、診断手法についてのエビデンスは乏しい。今回、我々は漢方の診断の中でも東洋医学に特徴的である“気”の異常についてエビデンスが得られないか検討した。また、漢方薬の効果について、自律神経検査を用いた客観的な分析を行った。

【方法】1) 気が不足した病態である気虚、気が閉塞した病態である気うつについて検討した。脳ドックの質問項目として「気虚スコア」、「気うつスコア」を導入した。脳ドック台帳にスコアを入力し、他の因子との関連性がないか統計的に解析した。2) 漢方薬の特徴として、自律神経に作用して症状を改善する効果が認識されているが、その客観性について検討した。臥位と座位で脈拍および血圧変動を計測できる Head up-tilt 装置を用いて、健康成人ボランティア 10 名に葛根湯服用前後で測定を行い、自律神経指標を解析した。

【結果】1) 脳ドック症例の分析結果であるが、気虚・気うつスコアは SDS（うつスケール）、症状数と相関がみられた。動脈硬化度と相関がみられたが、頭部 MRI 所見とはいずれも相関がみられなかった。2) Head up-tilt test (HUTT) で、葛根湯服用後では立位での交感神経指標の亢進がみられた。交感神経の亢進は、20 歳代例に比べて 50 歳代例で低下していた。副交感神経は臥位では葛根湯服用後に逆に亢進していた。立位での減弱はみられなかった。今回 2 つの研究デザインで漢方薬の客観的評価を試み、興味深い結果が得られたことより、さらなる研究の推進が必要であると考えられた。

漢方薬と客観的指標の関連性を明らかにする

1) 脳ドックデータ解析



2) 自律神経指標

